対面授業

技術科教育法Ⅰ
Methodology of Teaching Techincal Arts Ⅰ

HAYAKAWA Shinichi
早川　信一

科目ナンバリング：UTL-2-201-12

■授業の目的及び到達目標
技術・家庭科の技術分野の教育課程、指導内容・方法等について、法令、学習指導要領、各種報告書、教育研究等を通して理解し、教材作成・教材開発、事例研究等を通して実践的な知識・技術の修得と技術科の授業における実践力の育成を図ることを目的とする。
学習指導要領等に示された技術科４分野の目標、指導内容、指導上の留意点、学習評価等を理解し、各分野の授業計画と学習指導案の作成及び授業実践できる力を修得することを到達目標とする。

■授業計画
1 教育課程上の技術分野の目標と位置づけ
中学校技術・家庭科、技術分野の教育の意義を解説する。自分の中学時代の技術科授業を振り返り、技術教育の意義について考えをまとめる。
2 技術科教育の変遷
これまでの学習指導要領の変遷を解説・確認しながら、各改訂時における技術分野の目標を分析するとともに、今後の技術教育の在り方について新学習指導要領を読み解き検討・考察する。
3 学習評価①材料と加工に関する技術 A
「材料と加工に関する技術」の学習内容・評価の在り方について解説し、評価規準を検討する。
4 学習評価②生物育成に関する技術 B
「生物育成に関する技術」の学習内容・評価の在り方について解説し、評価規準を検討する。
5 学習評価③エネルギ変換に関する技術 C
「エネルギ変換に関する技術」の学習内容・評価の在り方について解説し、評価規準を検討する。
6 学習評価④情報に関する技術 D
「情報に関する技術」の学習内容・評価の在り方について解説し、評価規準を検討する。
7 技術分野 A～D の教材開発
技術分野Ａ～Ｄの４分野を総合的に扱う教材開発について検討する。4 つの技術分野の連携を考え、発展的学習である探究に結び付ける技術科学習の展開方法について検討する。
8 ものづくりを考えた授業計画
ものづくりなどの実践的・体験的な学習の進め方、授業計画の在り方について検討する。
9 週及び年間指導計画と評価
技術分野Ａ～Ｄの４分野について、実際の週案・年間指導計画の作成法について解説するとともに、各分野の年間指導計画及び評価計画を教科書を活用しながら作成し、発表・検討する。
10 教材の取扱いと学習指導案
技術分野Ａ～Ｄの４分野の教材の取扱い方及び、学習指導案の作成方法について解説し、各項目の実際の作成法を具体的に学ぶ。とくにＡ～Ｄの各技術分野の評価基準について第 3 回～第 6 回の授業内容を整理し、最終まとめを行う。
11 キャリア教育と技術教育
キャリア教育の視点に立って、普通教科としての中学校技術科指導の在り方について理解し、実際の授業について検討する。
12 技術教育実習における安全教育
実際に技術分野の実習授業を行う際の安全教育を理解し、事故対応等について具体的に KYT シートを利用して検討する。
13 学修のまとめと知識基盤社会における技術教育
知識基盤社会における技術の進展に伴い、創造性を育てる指導の在り方について検討する。学修のまとめとして、論述形式の試験を行い、フィードバックとして内容の解説をする。

■授業の方法
毎回テーマを定めて、教科書、資料を活用しながら講義及び課題解決学修を行う。実習、教材作成、演習、研究協議など体験的な学修を多く取り入れ、実践的な学びを重視する。A～D 分野を理解するために DVD も活用する。

■予習・復習
４つの分野を学ぶため、各回ごとに課題をまとめながら、授業教材や指導計画を作成し、授業で発表する。
予習として、ブラックボードに示した教材を事前に読み込んでおく(１時間程度)。
復習として、授業で指示した課題を整理し自分の考えをまとめ提出する(１時間程度)。

■成績評価の方法（成績の評定方法、授業態度、レポート等の扱い）
課題の提出状況から授業への取組を評価する。論述形式の試験を行い、到達度を評価する。
試験５０％、学修への取組状況（課題の達成状況等）５０％

■教科書・参考書
参考書：文部科学省「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説－技術・家庭編－」を使用。授業テーマの必要に応じて資料を作成し、授業時間ごとに配布する。具体的な実習例として DVD なども利用する。また、中学校技術分野教科書(開隆堂・東京書籍・教育図書)を活用する。

■関連する科目
技術科教育法II・III・IV及び、技術教育に関連する工業科教育法にもつなげる。

■当該科目の実務経験（該当する場合のみ記載）
担当教員は、東京都公立高等学校に３７年間勤務(管理職期間を含む)し、進路指導・生活指導・学校改革・研究活動・SSH 指導等に関する分野に研究実績を積んできており、それを本科目の指導に生かしていく。